

## 科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 29 年 6 月 8 日現在

機関番号：34504

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2014～2016

課題番号：26380659

研究課題名(和文) 相対的剥奪の計量社会学的実証研究

研究課題名(英文) Quantitative Sociology on Relative Deprivations

研究代表者

中野 康人 (NAKANO, Yasuto)

関西学院大学・社会学部・教授

研究者番号：50319927

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,600,000円

研究成果の概要(和文)：研究期間中、キルティプル調査のデータ分析、複数地点でのインタビュー調査(カトマンズ盆地、東部丘陵地区、タライ平原地区)、ネパール政府ならびにトリブバン大学の現地研究者と協力した全国調査票調査を実施した。理論的な予想通りに、収入や階層帰属意識そのものは満足度の違いに効果を持たないものの、相対的剥奪感が満足度に有意に影響を持つということが判明した。剥奪感は、最終的には自分の理想状態と現状との比較となるが、民族・宗教・カーストが経済的にも空間的にも多重に絡まりながら社会変動が続くネパール社会では、他者との相対的な比較が特に政治的な場面において顕著になることが明らかになった。

研究成果の概要(英文)：During the research period, we have conducted data analysis on the Kirtipur survey, field interviews at multiple sites(Kathmandu Valley, Easter Hill region and Terai), and nation wide questionnaire survey in cooperation with the Nepal government and Tribhuvan University. As theoretically hypotesized, income and hierarchy attribution itself has no effect on differences in satisfaction, however, it turned out that relative deprivation has a significant influence on satisfaction. The deprivation would be internalized as a comparison between one's ideal state and his present situation. In contemporary Nepal society, where ethnic, religious and caste entangle in multiple ways, relative comparisons became more evident especially in political scenes.

研究分野：計量社会学

キーワード：相対的剥奪 ネパール 計量社会学

1. 研究開始当初の背景

相対的剥奪とは、個人や社会の状態を、絶対的な状態ではなくある参照点からの相対的な位置関係で把握しようとする概念である。Townsend(1979)のように、ある参照点と比較した際の客観的事物の欠落をもって剥奪を定義する先行研究もあるが、社会学分野では Stouffer et al.(1949)、Merton(1957)、Kosaka(1986)を嚆矢に、準拠集団との比較によって個人内に発生する剥奪感とその集積としての集団全体の剥奪度が研究の対象となってきた。高い期待が持たれる準拠集団に属する方が、低い期待しか望まれない準拠集団に属するよりも、高い剥奪感が醸成され、不満につながるというのがそこで導きだされた結論である。また、格差の縮小が必ずしも剥奪感の緩和に結びつかず、逆に、かえって剥奪感を増幅しうることが示された(浜田,2007、石田,2009 など)。

2. 研究の目的

本研究の目的は、「相対的剥奪」が社会における「主観的幸福」や「不満」そして様々な「社会的な行動」に与える影響を実証的に明らかにすることにある。相対的剥奪は、準拠集団や他者との比較によって発生するものである。本研究では、カースト制度が社会階層の基底となっているネパールを調査対象とすることにより、相対的剥奪が発生するプロセスをより明確にする。

本研究の特色の一つは、相対的剥奪の実証研究としてカーストに着目した点にある。先行研究の相対的剥奪は、階層意識であったり、組織内の集団であったり、移民集団などを研究の対象としてきた。しかし、カーストという大規模かつ強固な社会階層を対象とした剥奪研究は希有である。また、剥奪の根拠を現状だけでなく、過去や未来や理想と比較することによって算出する点、そして剥奪の参照点を個人、内集団、外集団と複数のレベルでとらえる点が、本研究の特色となる。

別の特色は、ネパール社会を対象としたおそらく初めての計量社会学研究という点である。ネパール社会を対象にした研究は少なくないが、その調査手法は多くの場合いわゆる質的調査にもとづくものである。研究代表者は継続的にネパールを訪問しており、これまでの聴き取りや参与観察に基づいた、骨太な調査票調査が実施できるものと考えられる。

3. 研究の方法

図1のように、本研究のネパールにおける調査票調査では、三つの次元

- (I)対象者個人の状態
- (II)自分が属するカーストの状態
- (III)他カーストの状態

で状態を評定してもらおう。そして各状態の評定は四つの側面

- (A)現在
- (B)過去
- (C)未来(D)理想

について測定する。これら、三次元四側面の評定値の差をとることによって、個人の相対的な状態つまりは相対的剥奪(場合によっては充足)を測る。例えば、IAとIBの差は個人の過去と現在の相対的剥奪、IAとIIAの差は内集団の相対的剥奪、IAとIIIAの差は外集団との相対的剥奪を意味する。この測定方法により、異なる種類の相対的剥奪が定義できることになる。

本研究では、こうした多様な相対的剥奪が、(1)カーストの状態や社会状況の動静とどのような関連のもとに発生するのか、(2)幸福感や不満そして社会的な行動にどのように影響するのか、その程度や方向について調査票調査の分析から明らかにしていく。

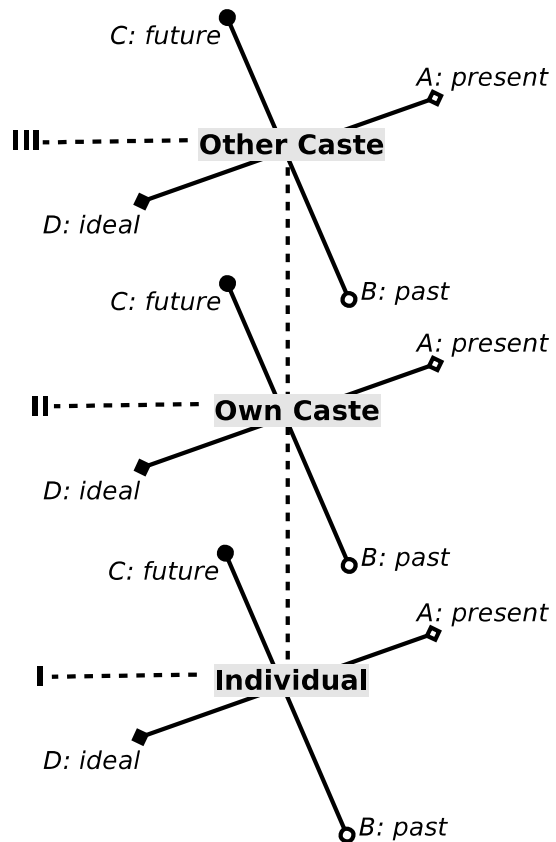


図1: 参照点の三次元と四側面概念図

4. 研究成果

まず、キルティプルで実施した予備調査データを分析しながら、現地共同研究者とネパール社会における様々な階層・地域の人々にインタビューを行った。そこでは、人々が感じる一般的満足度の差異を、カーストの(現状、過去、未来、理想との)差異で説明することを試みた。

そこから得られた知見は、理論的な予想通りに、収入や階層帰属意識そのものは満足度

の違いに効果を持たないものの、相対的剥奪感が満足度に有意に影響を持つということである。ただし、想定していた準拠集団（カースト）に対する相対的剥奪感（自分の現状と自らのカーストの状態との差）の効果より、個人の内的な相対的剥奪感（自分の現状と自らの理想的な状態との差）の方がより大きな効果を持っていた。両者は比較的強い相関があり、相対的剥奪感が準拠集団との比較を起点にしているものの、それが内面化された自己との比較となった時により強い効果を持つというメカニズムの証左であろう。

満足度については、一般的な満足度に加えて、詳細な分野別の満足度も測定した。家族、友人、結婚といった人間関係に関する満足度は極めて高く、不満を表明した回答者はわずかであった。収入や生活水準といった生活環境に関する満足度も満足度が高かった。分野別満足度で比較的満足度が低かったのが、教育と仕事についてである。また、唯一不満足が満足を凌駕していたのが政治（民主制）についてであった。政治に関する満足度の差異についても、一般的満足度と同様に個人の内的な相対的剥奪感が効果を持っており、それに加えて、カーストの違いそのものも依然として効果を持っていることがデータから確認できた（表1）。

表1：政治（民主制）への満足への影響

	dissat.:democracy					
(Intercept)	4.58	***	5.28	***	3.63	***
gender : F						
gender : M	0.11		0.24		0.01	
age	-0.02	***	-0.03	***	-0.02	**
education	-0.24	***	-0.24	***	-0.14	**
income	0.00		0.00		0.00	
stratification	0.17	***	0.16	**	0.20	***
status eval.	0.04		-0.02		-0.02	
RD:ppr-ppa			0.06		0.06	
RD:pft-ppr			-0.02		0.02	
RD:ppr-pid			0.09		0.17	**
RD:ppr-opr			-0.01		0.06	
RD:ppr-opa			0.03		-0.03	
RD:ppr-oid			0.02		-0.01	
caste:I						
caste:II					0.58	
caste:nI					1.18	
caste:nII					2.09	***
caste:nIII					1.14	***
caste:nIV					1.89	***
caste:nV					1.69	**
caste:V					0.04	
adj. R <sup>2</sup>	0.04		0.13		0.16	

本研究では、同じ枠組みの調査票調査を再度ネパールと日本で実施する予定であったが、2015年4月に発生した大地震とその後の現地の政治的混乱による調査環境の悪化に伴い、研究計画の変更を余儀なくされた。結果として、ネパール政府ならびにトリブバン大学 CNAS の現地研究者と協力して、ネパール国内の複数地点から2100人を対象とする全国調査票調査を実施しデータを得た。また、複数回にわたる現地調査を実施した。現地調査は、カトマンズ盆地内だけでなく、ジャナクプル（ダヌサ県）やカンドバリ（サンクア

サバ県）など、政治・文化・経済の状況が異なる社会の視点を取り入れた。政府高官や各地のローカルコミュニティ関係者とのインタビューを通じて、当時制定プロセスにあった新憲法において、marginalizedな集団（カーストや民族など）がどのような位置付けになるのか、その理念と制度について確認を行った。新憲法では、「平等」「地方分権」「アイデンティティ」が大きな理念となっているが、地方から中央への政策立案・予算策定の段階において結局はマイノリティが阻害される制度になっているとの指摘を受けた。

全国調査については、現在詳細の分析を継続中である。現時点では、カーストのみならず居住地域の違いによる社会状況の認識の差を明らかにすることができた。中央政府が計画する地方開発施策と各地方の住人のニーズと評価の間には大きな乖離があり、さらに各地域社会における階層構造による相対的な比較と相まって、多重的に不満が醸成されるメカニズムがあることがわかった。例えば、図2は中央政府が進める地域開発計画の知識の程度（Q20）と開発事業参加への有効性感覚との関係を表したものである。開発計画へのアクセスは概して平等なものではなく、その内容を知っているものは開発事業への参加に意義を見いだしているが、そうでないものは参加することそのものに否定的になっている。この研究成果は、現地発行の学術誌の特集記事として発表予定である。

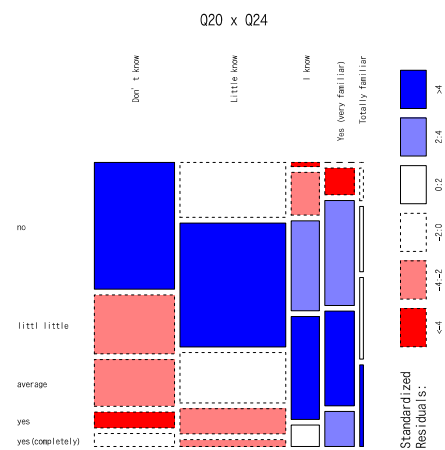


図2：地域開発計画の知識(Q20)と有効性感覚(Q24)の関係

また、多国籍・多言語での調査プロジェクトを効率的に進めていく上で、調査票・調査データ・コードブックなどを共有する規格を整備し、それを統計解析環境Rで処理するためのパッケージDDIRの開発・改良にも取り組んだ。

## 引用文献

浜田宏, 2007, 『格差のメカニズム 数理社会学的アプローチ』勁草書房.

石田淳, 2009, 「相対的剥奪にかんする Boudon-Kosaka モデルの進化ゲーム理論的分析」『第 47 回数理社会学会大会研究報告要旨集』12-15.

Kosaka, K., 1986, "A Model of Relative Deprivation," *Journal of Mathematical Sociology*, 12(1):35{48.

Merton, R., 1957, *Social Theory and Social Structure*, Revised and Enlarged Edition, The Free Press, New York.

Stouffer, S.A., Suchman, E.A., De Vinney, L.C., Star, S.A. & Williams, R.M., 1949, *American Soldier vol.1: Adjustment During Army Life*, Princeton University Press.

Townsend, P., 1979, *Poverty in the United Kingdom*, Allan Lane, London.

## 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計 1 件)

中野康人, 2016, 「政治的価値観の変遷に関する記述的分析」, 『関西学院大学社会学部紀要』, 123, 123-134, 査読無.

( [https://kwansei.repo.nii.ac.jp/?action=repository\\_uri&item\\_id=17511&file\\_id=22&file\\_no=1](https://kwansei.repo.nii.ac.jp/?action=repository_uri&item_id=17511&file_id=22&file_no=1))

〔学会発表〕(計 6 件)

Yasuto NAKANO, "DDIR : R package for handling DDI file," EDDI16 - 8th Annual European DDI User Conference(Cologne, Germany), 2016.12.7.

中野康人, 「DDI と R を利用した社会調査の統合環境」第 89 回日本社会学会大会, 九州大学(福岡県福岡市), 2016.10.9.

Yasuto NAKANO, "Integrated Environment for Social Research Data Analysis: DDIR," IASSIST2016[annual conference of International Association for Social Science Information Services & Technology](Bergen, Norway), 2016.6.3.

Yasuto NAKANO, "DDIR and dlcm : integrated environment for social research data analysis," R user conference 2015 (Aalborg, Denmark), 2015.7.1

Yasuto NAKANO, "Caste System and

Relative Deprivation in Nepal," XVIII ISA World Congress of Sociology, パシフィコ横浜(神奈川県横浜市) 2014.7.16.

Yasuto NAKANO, "An Integrated Environment for Social Research Analysis," R user conference 2014 (Los Angeles, USA), 2014.7.1-3.

〔その他〕

ホームページ等

<http://www.soc-nakano.net/>

## 6. 研究組織

### (1) 研究代表者

中野 康人 (NAKANO, Yasuto)

関西学院大学・社会学部・教授

研究者番号: 50319927